新續古今和歌集

853
166

函號 二架 七八

書名 二十一代集

冊數 五六

類 和歌

第十三號

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

再入万葉哥　春下一　秋上二首　秋下一　旅一首　恋二一
恋四一　恋五三　都合十首
但再入哥　秋上　玉葉一首　秋風にきりとふかりの　恋一続古今
ちらくとおきつる袖の　恋下　忍ひ　かのひとしもあさまし
以上三首

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

新續古今和歌集序

天成地定八雲之文斯明古往今來象製之体屢改若夫長歌短哥之異曲五字七字之同工旋頭之有餘混本之不足雖以似分於歩驟皆莫不發諸性情然而爲文於五音工寄興於四序彼句數之有合實揣理之自然是以出雲表之於前難波継之於後羨君德則有富緒川之什和王恩則有淺香山之篇或歌小藤於版築之中或頌南橋於民姓之始蓋三十一字之作所以專感而永傳也　平城天子詔侍臣撰萬葉集已來集更二十代祀逾六百雲蒸霞蔚則卷歴汗牛之書絲句繪章則光奪抵鵲之玉譬猶浩湯執業而群宴異兆郢匠提竹而棧盡山中雖於言泉流於筆端的焉不竭恩風發於胸次作則孫高騰馥遺芳方知露被後世青藍寒水豈不潤色前修古曰人丸既沒和歌不在於茲乎信哉斯言今國家膺中興之運同上古之風時有所而字群莫不趣者無貴無賤要覓驪龍之識一

唱一和思継廣載之義征夷大将軍源義相
秉左文右武之資懋南征北伐之續不啻股
肱于元首又毋於黎民又能回筆海之倒瀾
挙藝苑之墜諸爰奏于　朝言史撰集
者文思之標幟而今不作者已久矣寧非明時
之欠典乎由是遂擇禁内便宜之殿為和歌
編撰之所延喜命四臣於芸閣天暦置五人
於梨壺文元久於鳥羽離宮文永於亀山仙
洞已若合符契曷不資準的耶仍詔権中
納言藤原朝臣雅世専掌其事論思献納

風夜在公出入古今取捨義悪継雖非青天之窺
管果得無滄海之遺珠凡歴六年粛就一集
春夏秋冬之変風雲草木之興可以悪可
以群可以義可以刺藻麗有葉敷者巌塞去
行餘者推而廣之不可詳悉上抱三代之餘
風下貽千載之偉観故名曰新続古今和歌
集者也永享戊午八月下澣謹序

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

渡邊千秋藏

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

西行
[illegible]

新續古今和歌集巻第一

春哥上

年内立春の心をよみ侍ける
権中納言雅縁
春きぬといふより空も霞て年のこなたにへたてく立霞哉

立春氷といふ事をよませ給ける
後小松院御製
汐風の浦やよせくる浪のまに氷はとけて春はきにけり

庭知春といふ事を
左大臣
いはゝきの山のはかれハ霞やたちて春はきぬらん

弘安元年亀山院に百首哥奉りける時
春哥中に
土御門入道前内大臣
春やとき浪にかけてそ立そめん霞にうかふ末の松山

題しらす
清原深養父
春日さすまつやみ雪のきえやらぬ谷にも春やきぬらん

正治二年後鳥羽院に百首哥奉りける時
後京極摂政前太政大臣
春ハ猶あさ海のみけにやすらへて人の姻ハ宮守なりけり

山霞
従三位雅家

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

延文二年百首哥たてまつりける時蘆を

等持院贈左大臣

さゝ浪もよせかねてけり志賀の浦やあさ氷して立寒みかな

法印経賢

松原のみとりやうつる霧のうちにみえぬ長津の雲の曙

題しらす

俊恵法師

あゆちかた塩ひの浦をみわたせは雲の底よりみゆる舟かな

万三
桜田へたつ鳴渡る年魚市かた塩干にけらしたつ鳴渡る

建保三年名所百首哥たてまつりける時

前参議忠定

遠乃やのゝ浦はの塩風に松里まて春たつ雲のよる

貞和二年光厳院に百首哥奉りける

中宮大夫公宗母

ゆらのとや霧をへたてゝあくる舟のいくよし浪のうき人の身

家に哥合し侍りける時

後九条前内大臣

信濃なる浅間の嶽の煙をそをちこち人もみぬ雲にや

なき跡になりて誰をかたらひて秋時雨

四季百首よみ侍りけるに　参議雅縁

かはらむ世にも緑もかはらし浦の松の末の浮雲

河雲

従二位家隆

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

彩勅

播磨の明石の神やまもるらん夜はあらき宇治の濱

嘉元々年百首歌奉りける時霧を

前大納言経継

難波潟のかれのやへ垣霧こめて夜はれまは隔けり

ことなる心を

権中納言雅世

あまのたく浦やく煙立そひく霧もなひくら風そふく

二品法親王覚助家五十首歌に浦霧を

大蔵卿重経

藤しほやく煙は末も浦風に末や霞の梢にもなひかん

散木三　大貳仲実のち白河乃宮

大弐長実卿八條家にて

昭乃天治長実家にて歌合し侍りける時霧

源俊頼朝臣

いつしかと霧にへたつる塩竈の浦ゆく舟のかくれぬるかな

嘉元元年内裏十五首歌合に　野径霧

藤原信実朝臣

あきさりて野の霧にへたつ人も袖しほる夕暮

従三位範宗

高まとの木野の里は煙立るへ霧に隔つ夕かけの

遠山霧といふ事を

権中納言雅縁

去年とし秋の木の浦風にかけてみちもそへぬ紀の山

新玉津嶋社哥合に浦霞

宝篋院贈左大臣

明石かた潮の遠風吹そめて見えぬ奥は白浪

前参議行忠

和哥浦のあし入乃ゆふ汐にこゝろへて立霞かな

治承二年神主重保すゝめ侍りける賀茂社

三十首哥合に霞を　二條院讃岐

春霞ふかきま浪上ありの松のみそれとなつかしさに

なき詩の句を思ひて百そそよくおもひにき

峯帯晩霞といふことを

能因法師

菅原や伏見の暮に見わたせは遠くの山も河霞かな

宝治二年後嵯峨院に百首哥たてまつりけるに

暮春雪　山階入道左大臣

かへるさしあれは雪まの浪て猶の野へはまたきえぬ

野径残雪といふことを

権大納言経光

降つもる雪の白山消てわかれ行山の野への道

正治三年新撰哥合に山家残雪といふ心を

後鳥羽院御製

錦にもたくひこぬ松の緑乃色まさる春の浅緑

春の中に　二条院讃岐

春ごとも花につれなき雪のこりて深山の松にかかれる

延文二年百首歌奉りける時

前大僧正賢俊

をのつから待たるゝ人は降りにしてよそにも花をまつの木かけ

後九条前内大臣家にて百首歌合し給けるに　雲

右衛門督経家

高砂の尾上の松の春風にかすみてかへる雁の訊

聞しらす

従二位家隆

九重の岩戸ひらきし吉野山の花もさかぬ

弘安元年百首歌奉りける時

式乾門院御匣

吉野河岩こす浪も春風にかへる花そ立波の初訊

安嘉門院四条

訊ありし花も深き谷の春をかさねて過ぬ春の春

文治六年女御入内の屏風に人の家にて

花の中にうちかへて春はす

皇太后宮大夫俊成

春来れは花にうつる人の宮は花咲宿のあるしなりけり

百首哥よみ侍りし時鶯

右大臣

春なれは日影にとくる雪さへまた消えぬ梅かえの鶯の上

崇徳院に百首哥奉りける時

大炊御門右大臣

いつしかと咲そめしより鶯や梅のこすゑに花さかりなん

貞和二年百首哥奉りけるに

民部卿為明

春来ても梅のさかりハ風にて花ちるまてに鶯そなく

後撰
梅の花よそなからみむわきも子かとかむはかりの香にもこそしめ

鹿苑院入道前太政大臣家百首哥に

朝鶯といふことを　権大僧都尭尋

春ハまた朝風さむき谷の戸に日影待えて鶯そなく

題しらす

柿本人麿

二葉よりわかしめゆひし人のためなれ松とかねてしらなむ

堀河院御時百首哥奉りけるに子日を

藤原顕仲朝臣

うへしをの二葉の松をひきつれて千代をかそふる今日の子日を

圓融院御時紫野にて子日し侍りけるに

民部卿文範

紫野八重にかすみたる野を出て人ハひくらん

元亨尺出家勝講
右台右備乃宗子之
えらる人し

三代実録
紀伊郡芹川野
文永七年毎日一首中
里人もちよのためしに
いくつからわかなつむらん
為家

文保二年百首哥たてまつりける時

三條入道前太政大臣

うちなひくかたはそれともみえねとも雉子なくへにおもひ宮あるらし(?)

若菜をよめる　按察使顕朝

はまれぬ日の宮代清やらて野へのわかなも下ゆへそせん(?)

建保四年後鳥羽院に百首哥たてまつりける時

従二位家隆

ましられハ母の世の跡ふみそめし河にわかな摘らん(?)

弘長元年後嵯峨院に百首哥たてまつりける

後九条前内大臣

ゆくふ

文應三年七社百首
民部卿為家
[illegible]
里人の山田の原に
[illegible]

万一
川上のつらつらつはき
つらつらにみれとも
あかすこせの
[illegible]

ゆく又山田乃原も雪ふりて神代の跡はみちにまつらん(?)

延文二年百首哥たてまつりける時

中園入道前太政大臣

霞たく野人のみちは白妙の袖をかさねて若菜摘けり(?)

権中納言為重

宮もましねもきけて河上の世乃春風ハわかなをつむらむ(?)

若菜を読侍りける　成恩寺関白前太政大臣

うちわたす宇治乃方人も春そしる野の沢にわかな摘らん(?)

百首哥たてまつりし時

権中納言雅世

もろこしの野への原にみちて行春の日数をつむやわかなかな(?)

嘉元百首哥に　中納言為藤
と山田の苗代水もせきかねまふ見ぬ水もあやくみなもとそつむ

正治二年百首哥たてまつりけるに　二品法親王守覚
霞しく日かすにあさる雉子も心あくまや鳴つらん

最勝四天王院の障子に武蔵野かきたる所に　前中納言定家
むさし野やゆかりの色もとひ絶ぬみなから霞む野辺の若草

建保百首哥奉りける時　前大納言忠良
摘ねハおもる緑を先さ世て春の色え若菜の下草

新勅撰　入道二品親王道助
よもの野はまたうら若き　やみ若草の　いろき野のやけ

前中納言雅有
もえ出て猶みとりなき若草の雪まもうかかす野辺への色かな

正治二年哥合に若草似によませ給ける（新勅撰道助法親王家五十首）
後鳥羽院御製
春きても猶雪八深くやとても見えよ道野辺の若草

百草に今めされけるついてに早蕨を　崇徳院御製
春の野に雪まの水ハかるるつつもえもいとわかなか下わらひ

宗仁親王

山賤の折るまちかき花をいまも袖にうつれぬ香のまま　歟

梅花をよめる　二品法親王尊胤

きておれる袖にうつるやうすく咲く宿にかさねし梅の匂ひ

文保三年百首歌奉りける時　後西園寺入道前太政大臣

まつ花にかゝる花をも色にかへて梅さく宿の香にあへる宿

貞和百首歌に　後福光園摂政前左大臣

梅の花それとはみえぬ山本の霞にかをる春の夕暮

応安元年三十首歌読侍りける時　依風知

梅といふ題を　前大僧正満済

色にいてしるく　かほるへし

をのつから風の使にさそふ人もをしむやらで宿に梅かゝ

梅花遠薫といふことをよめる　前参議雅有

袖の上に風はうつれてあかずもあかぬ袖まで宿に梅かゝ

文治六年女御入内屏風に人の家ある所に梅の花さける所　前中納言定家

春をへて何かはかくもしられけり花のゆかりの梅の下風

弘長百首歌奉りける時　春梅　従二位行家

紅は色ふかくいもか袖かけにほふやまさくら梅の初花

詠梅といふことを　　称名院入道内大臣

諸人のさそふなれや春ことに梅のにほひを年の春風

百首歌の中に　　土御門院御製

梅か香も誰袂とか結ふらん我もの香はうつりゆく夕への世

梅風聞といふ心をよませ給うける

今上御製

色も香もたくひはあらし咲そめて我をまちける梅のした風

紅梅の梢をよみける　瑒子内親王つかう

瓊子内親王

匂ひゆく風のつてまてさそはれは誰か袖にもかをる宿の梅枝

同　　瑒子内親王

こそ見しにほひなりけりいまはまた春をさそはぬ梅の匂ひは

寛治百首歌奉りける時梅薫風といふことを

太宰権帥為経

誰里とわきて見ぬ梅の花さかりにほふ昔の春風

百首歌の中に

式子内親王

あるしなき宿のはなれても袖にもかをる宿の梅かえ

貞和百首歌たてまつりし時

等持院贈左大臣

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166　　ガラス使用

おなしこゝろを　按察使公保

あかすしてやかて消えなん色ならはおなしこゝろも世にや花はちらまし

百首歌奉りし時初花

前大僧正義運

咲かゝる一えたゆかしみ山の名は雲とみまかふ花のいろいろ

正治百首歌奉りける時

後京極摂政前太政大臣

正治百首 定家卿哥也

花のゆきをされてさそはれて神なひ山の春のあけほの

寛治百首歌奉りけるに

元口盛茂

今年よりわかぬなきひとまて世々の風のとかなる春の初む

貫之

家々人々花歌よませ侍りし時

左大臣

ことしよりわきて手に残る花をみるへき万代の春

新続古今和歌集巻第二

春歌下

百首歌めされしついでに見花といふことを
よませ給うける　今上御製

さきまさる雲かとみえて足引の山桜のみえぬまもなし

延文二年百首歌奉りける時　後深心院関白左大臣

横雲は峯にわかれて咲花の色もわかれぬ明ぼのの空

題しらず　法印源誉

咲かゝるをりをよむ山人のさくら花宿にてをはいつ見れてかし

花歌の中に　源満元朝臣

立ならふ雲のよそめにみえつるは世にしられぬ山さくらかな　不審

千五百番歌合に　正三位季能

花ならんと立ゐるゝ雲はさて心にかゝる春の山風

貞和二年百首歌奉りけるに　後岡屋前関白左大臣

遠里もおなしさかりに成にけりまつ咲ての花をとふまし

宝治二年百首歌奉りける時翫花　皇太后宮大夫俊成女

春も今は花は桜の時ならしやよひもなかば白ぬのゝさきけ山

應安四年内裏にて人々題をさくりて哥
つかうまつりける時花始開といふ事を
儀同三司　実
咲かまて更級よみしさかりも人しらぬ山さくら哉
山花といふ事を　法印経賢
さかぬまておもひしまゝなきの外山の花を雲とこそみる
おもふ心を　入道一品親王永助
高砂の尾上の花乃ちるをみてそ法あへぬ松の宮とみえける
不審
應長元年百首哥奉りける時花
衣笠前内大臣

續千載集上
権中納言公雄
さけ嶺の外をもしられて山さくら
古
まちえたるいくそ……ひのまて……ねしこめのゆかしきの見……
みよしのゝ山乃桜の絶まよりわかれて咲花哉
建保三年哥合に春山朝といふことを
前中納言定家
この頃の朝日の山の松風に霞を分て花のかそする
知らす
従三位頼政
白河やさかり過ゆく波の花よりも猶かへらぬ花を
貞治三年仙洞にて人々題をさくりて
十首哥奉りけるついてに見花といふ
ことをよませ給ける　後光厳院御製
桜さく木の下陰乃宿なれはおもふことなくみよしのゝ里

住吉社にたてまつりける百首歌に山花を
儀同三司資

吉野山流のすゑのみをしみてくもあかぬ花の色かな

新玉津嶋社三十首歌に
四辻入道前左大臣

みよし野はいつも花の陰なれはよそにてよそらの紅も郎を

前大僧正果守

られてしるおとろ道なれなりとも聞えてきつる花の下陰

翫花といふ事を
中務卿宗尊親王

見るまゝは花にわかれのなこりもみよしの山

花の歌の中に　平宗宣朝臣

うつし植花乃香をる春風にわけ行雲も梢なりけり

百首歌よませ給ひける中に
後小松院御製

花さかぬ梢はさらにまれなれや神代の色にかほるさくらは

建仁元年後鳥羽院に五十首歌たてまつりける時遠山花を
宮内卿

ゆきてつる跡はいつくにかはりて花よりわたる志賀の山こえ

千五百番歌合に　惟明親王

みふ人の花を翫て出ぬまゝは雲の宿かる峯の白雲

法金剛院の花さかりに人々日くらしあそひて
よみ侍りけるに　二品法親王守覚
たちかへりおなし木陰に宿りせて別れかたしの花のまと
花のまとゐに　西行法師
おほつかな春は心の花にのみいつれの年かうかれそめけん
月前花といふことを　寂延法師
白妙のさかりの桜さきにけりかすみもやらぬ月の影ハ
千五百番歌合に　後久我太政大臣
あさちやハ篠原の庵にすむ山人さ花にもあかぬ庵の月影
延文百首歌に　一品法親王法守

桜かりかへる山路はくれはてゝゆくや花を月にみるらん
文保百首歌よませ給ける中に　後宇多院御製
旅人のこゝろもいそかてうちむれて花にやとかる志賀の山こし
大原野の桜を見て人にいひつかはしける　藤原實方朝臣
雉子なく大原山の桜花かりにあらてしはしこしは
弘長元年百首歌奉りける時花　藤原信實朝臣
家路をハいそかぬ袖を袂にも猶ますも花の下かけ

康安二年春の比東陽に住侍て歌合し侍りしに花を　二品法親王覚誉

うつろはむさかひやいつこ山桜よしの宿の花のこすゑは

住吉社によみてたてまつりける歌の中に

入道前太政大臣

花さかぬ梢はかりや白雲のうつろふ方やみよしのの山

古今　おなしこゝろを　やよひ　ゆきとまりぬるあしたをちるらん

春歌の中に　前大僧正道意

かさしつゝ人の花にはなれきても花のさかりはくれやはする

後九条前内大臣家歌合に

前参議忠定

とても身を折かたに思ひとらはや　おなし昔の花を見つゝも

貞和百首歌に　中園入道前太政大臣

ちるをこそなをしも今はおもふらめ花のみよしの花の面影

前中納言為秀

人はとてもそをしまん風ならてしはしもやとの桜をも

徽安門院小宰相

世をいとふ心なくてもおもひいる花のさかりはみよしのの奥

遊花を　源義将朝臣

春は猶咲ちる花のかけにくる吉野の滝も浪や花なる

建保四年内裏歌合に

常磐井入道前太政大臣

山さくらかはらにはかへてちりしれて白ふ花乃下風

建仁元年二月後鳥羽院に五十首歌たてまつりし時

参議雅経

色はいさ匂ひは風に感なててその主もなき花山桜かな

弘安元年亀山院に百首歌奉りける時

前大納言為世

おしと思ふ人は風のたよりもあらぬ物とや花のちるらん

同三年春宮御方にて人々千首歌つかうまつりける時花随風といふことを

前参議雅有

ちるをしむ人もあらしにさそはれてふきつくしぬる花の下風

千五百番歌合に　寂蓮法師

たつねつる花の梢をさそふらし道はうけけに春の山風

百首歌奉りし時落花　花山院実雅

山さくら夕ゐる雲のそともなし吹こえて風に花やちるらん

河上落花といふ事を

権中納言雅縁

雪とのみさそふなみもおもしろし河風にさそはれてちる花の白浪

千五百番哥合に　参議雅経

山風の吹めくらすかふもと河ゐせきにいれぬ花も瀧の白波

永和二年百首哥たてまつりける時惜花　後八条入道前内大臣

ありてうき果をとしらすしたふまてちるをいとひの花しなかるかな

深守法親王

ふくかせよいかてそうきといはしもわかれぬ花の色はなき

題不知　中納言家持

鶯の鳴ちらすらん春の花いつしか君と手折かさゝん

千五百番哥合に　従二位家隆

鳴らし山花とそ思ふ鶯のかすみてふかき谷のそこのしら雲

左大臣によませ侍ける新玉津嶋社哥合に

夕落花　権大僧都尭孝

暮は今猶くをおしむる程まても花はとまらぬ春風そふく

延喜御時春哥の中に　紀貫之

桜さくふるさとつゝるひもなく折花これかためにそ我まさりけれ

崇徳院に百首哥たてまつりける時　皇太后宮大夫俊成

ちる花のたゝさそふとしてを心つくしに春の山かせ

題しらす

藤原教雅朝臣

あさなあさな桜を風のやとりにてもてうつさぬ木の本のまさき

住吉社によみてたてまつりける歌に落花

源経氏

かき世ともさそはれぬ花にみいさてあらしのくもりの花を散りけん

春の歌中に　左大臣業平

法印浄弁

八千年まて我か世にふる桜さへ様かはりぬる花の志ら雲

新玉津嶋社三十首歌に

前中納言實遠

いはふえもあれ志ろ夜なほえてもみえなくつもる花の白雲

慈道上人

木の下の庭の楽みにまよひて風に散りぬる花の志ら雪

花下遊宴といふことを　正三位義重

東とかさ○さへくやま下の春といひつつ花に志ら雲

題しらす

入道一品親王尊円

花によりて志る夜風はけしかりし宮にのみ散る

文永二年白河殿にて人々題をさくりて七百首歌つかうまつりけるに野花といふことを

後嵯峨院御製

雪とのみふりしさくら花散木のもとにはしはしさかり

曲水宴乃心を　権中納言家賢

新葉春下　妙光寺内大臣
あふりわすれやよひのみかは水乃心にうかへる花乃盃

文治六年女御入内屏風に澤のほとりに
春駒ある所　皇太后宮大夫俊成

春駒の野沢にたちて気色ありて若葉の草乃なれてなつくる

家百首歌合に雲雀をよみ侍りける
後京極摂政前太政大臣

浮雲の空に涼しくあかれぬ朝日まつよや雲雀なくらん

花を　前大納言為尹

あかすそこなとえ河の葉末京葉てもみしかたかたら水

権中納言雅縁

ゆくかれぬなそとみなの夕や薩野沢の水乃靜に藏らし

勇子馬をよませ給うける

土御門院御製

春の日の長原乃山かけにしるき花のかけさへ人そなき

順徳院御製

けふもまたけふの花乃峯にちるつ花さそふらむ春のあらし

年さらすちりけりと志
ろしもまきのを
ゆくらかとは
ふらら
出所不知

正治百首歌に雑を　後京極摂政前太政大臣

唐衣すそ野のきてはらしむかり古ましこのねさめの鏡

崇徳院に百首奉りける時　葉室顕

百十
[illegible]

去年の秋[illegible]

皇太后宮大夫俊成

[illegible]

建仁元年三月十六日新撰歌合に水辺躑躅

前中納言定家

龍田川岩根のつゝし影みえて猶水くゝる春のくれなゐ

二番左持　忠良
[illegible]

文保三年百首歌奉りける時

前大僧正雲雅

[illegible]

里款冬を　後二條院御製

[illegible]の里は山吹の花さへ[illegible]

百首歌奉りし時款冬を

藤原雅永朝臣

いくとせか[illegible]吉野山中ゆく川の山ふきの花

二品法親王尊胤

思へ人いはねをたつる款冬や人めつゝみの[illegible]

貞和百首歌に　入道一品親王尊圓

玉川の[illegible]山吹を[illegible]の里人

等持院贈左大臣

[illegible]山吹の花ちる里は[illegible]

住吉社に奉りける歌の中に

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

初瀬山雲に嵐吹そめてやとる紀峯に有明の月

建久元年七月歌合に暮雲雨といふ事を

よみ侍ける　順徳院御製

荒も皆ちりぬる宿の雨みより聞まね夕とき夜

前大納言為家

明方にかはる雲のしくれにて浦によし晴れ雲まの

貞和百首歌奉りける時

中宮大夫公宗母

今はてゝかへらんまてち原の松にさ雲乃末のむら山

建保名所百首歌に

正三位知家

とたえ雲のたえまも遠の松の梢をもりて有明の山のはの月

百首歌奉りし時雲春

権中納言雅世

やよひ山雲のかゝる峯もみのこりなくはれいありて有明の月

後三条入道前太政大臣

雲とは見る雲いつくより山をこしさそひて行らん

建仁元年新撰歌合に山家雲といふ事を

よみ侍ける　後鳥羽院御製

雲ぬるも霧あは柴の戸ぬ方も雲のあかるゝは

嘉元百首歌たてまつりける時

万秋門院

おなしき春も名残やしたふらん霞の袖の別れ路

永和百首歌に三月尽

前中納言定遠

をしくれぬ春をハ言の河よとにまかせさらまし山吹の瀬

新続古今和歌集巻第三

夏歌

更衣のこころをよませ給うける

後小松院御製

よしさらハおなしからをも名残まてときそめぬ花染の袖

百首歌めされしついてに

今上御製

とゝめしハ猶もうらめし花の香にしみしさ夜衣

首夏風といふことを

成恩寺関白前左大臣

吹風も枝やいとはん花の名残すくなき梢にほふまて

題しらす　前中納言定家

夜しらす…袖もかをりけり花のかそのこる

中納言為家家に五十首よみ侍りける時

花といふ事を　頼阿法師

されぬやと今しもとめし山桜まいつれなくみえし梢を

家にて題をさくりて五十首歌よみ侍りけるに

山新樹といふことを　左大臣

それとなく遠山桜花しら夜のこゑなりけり

夏歌の中に　法印源賢（杜 或字）

志るへもと見みしも山城の常盤の杜乃杜すし

夫木五一
六帖題の歌中に
ありあけの月まつそとも
ほとゝきすなのゝ雲
にさそふ…
中務卿親王　鎌倉

住吉社にたてまつりける歌の中に卯花を　後香園院入道前関白前太政大臣

つきそはゆかしき頃山桜ちりのまかひに咲る卯花

文保三年百首歌奉りける時　芬陀利花院前関白内大臣

朝なくも吉野の里の卯花も猶消ぬの月かとそ見る

文治六年女御入内屏風に賀茂下社神館のかたに葵かさしたる人ある所

前中納言定家

ちはやふる賀茂のみつかきまちいてて昔の世をかけあふひ加ん

千五百番哥合に　惟明親王

やまさと山郭公まつやまとをしもすきぬめらん

題しらす　中務卿宗尊親王

郭公いつかに待らんかくれ初音つけさき橘の

住吉のまつにかはらぬ方代中に此花

源兼之朝臣

郭公待ひとへてつれなくはあくるまでいねは一こゑもなる

千五百番哥合に　後久我太政大臣

待よそにつれてうつ夜の枕を結ぶよの時鳥宗親

杜郭公といふ事をよませ給ける

後二条院御製

郭公鳴につけても待こそはしのの杜の村雨の空

弘安元年百首哥に　大納言隆博

待ほどは夜はにしもねずまたれかはもきく

後深草院大納言典侍

おきあかして明つる夜を恨て山郭公まつなるらん

安嘉門院四条

待ほどは別されつれて郭公鳴かへつらん初音なるらん

前大納言為世

いまはゝや空もしろみて郭公声を待まにあけしもさすが

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

天暦御製

いにしへもかくやはありしかしこき世をもいはむ

正治二年石清水若宮歌合に

読人しらず

かくしつゝいつまでとまる心にて宿の梅をあはれと見らん

貞永元年七月歌合に暁聞郭公

後鳥羽院下野

はてそたにいそく山路の郭公都の人やまつなくらん

藻壁門院少将

きのまへ紀とよしかたる人聞るさやの中山あけて人にほし

源家長朝臣

旅夜ゆく跡の霧もわけて山かくれこえし瀬々のうらん

正治二年百首歌奉りける時

三条入道左大臣

昨夜のさ夜の枕に毎よなりあやめにかゝる軒の下風

文治六年女御入内屏風に菖蒲かりたる所

又人家にあやめふきたる所あり

前中納言定家

あやめ草けふさつきをあやめにもうくへの五月といふよ

夏歌の中に

後京極摂政前太政大臣

延文百首

民部卿為明

雅永朝臣

権中納言雅世

権大納言為

順法法師

参議雅経

後八条入道前内大臣

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

おなし時きさいの宮百首歌中に

権中納言雅縁

雲のかゝるとをき山の五月雨はまきのやもたえて時
猿のなく声もこゝろすこき事を

藤原雅経

ころもほすひまもいつかはやすらはてはれぬ夜半の月のみ

正治百首歌に

従二位家隆

さみたれは雲のかゝれる山の嵐のゆふ衣ほすまもなき袖の露

源夜将河と申ける紙

後京極摂政

古 [illegible]

さみたれは山陰くらき大井河月もなかなか清き瀬もなり

夏歌中に

一品法親王覚仁

今更にほしまつあやめ涼しさの…

従二位家隆

蚊やり火のつまなき宿の下もえをよそにもくもりの…

貞和百首歌に

前大納言公泰

山陰のつらゝかゝりてうめるかはの河に蛍飛

蛍をよめる

源光正

思ひあまりうちいづる瀬々の中なる泪に蛍飛

弘長元年百首歌に

おもかげは花さかぬ萩の下露も結ぶ夜のよの月

後小松院に人々題をさぐりて歌よませ給ひつかうまつりし時　朔夏月といふことを

権大僧都亮孝

月も猶秋待つ頃の影すゞしみ夜はさへ夏をわすれぬる

鹿苑院入道前太政大臣家百首歌の中に

夏月　権大僧都亮尋

古　短か夜の月は秋にて短夜の空にこそあれおなじ光を

延文百首歌の中におなじ心を

入道一品親王尊道

もろこしの人も見るらむ夏の夜の明けやすき月はうらめしき

夜の月の中に　後小松院御製

今はまの竹の葉さやぐ秋ならで夏の夜の月すゞしかりける

建保名所百首歌に

皇太后宮大夫俊成女

百首ニ　家隆

夏かりのあしのまよひぞさくら原おほ海にみし秋の月ぞすむ

翫月といふことを　養徳院贈左大臣

夏の夜はのこる月も忘れてやかて横雲にきえそゆく

崇徳院御時六月朔更衣郭公といふことを

皇太后宮大夫俊成

続拾遺旅　右大臣公賢季

影えんしも流しもる都にかへさを忘れぬみな月の空

瞿麦を　中納言家持

万八
我宿のなてしこの花さかりなり手折て一目みせん子もかな

後小松院にて人々題をさくりて哥つかうまつりけるに　前右兵衛督為盛

咲くしれ(?)猶夕暮の数ならぬ身もおもひしられける夕かほの花

蓮をよめる　前大僧正隆源

夏の日もかけて池の蓮葉に夕涼しゆく風そ涼しき

百首哥奉りし時夕立　左大臣

夕立の空は夜かけても猶涼し夕風の吹まゝに

延文百首哥に此題を　民部卿為明

万十四
埼たまのをさきの田おもし
おほかたのとりてもうれしき
かたちあをきへしも
此歌を東哥の中よ
国東方の中よ
見駿河の河名の
たとふるに八三
あつまをよみて国
東方の中より
しやうちさとれ
ことや涼しきと
いつ申し

すゝしくもあへの市人さわくらし坂あしかりつ夕立の空

貞和百首歌たてまつりし時　等持院贈左大臣

山田はねも涼し風過る流れにまさる夕立の空

嘉元百首哥奉りし　清原宣為

暁めくりやすくへうすし鳴蝉のこゑもさえ小山の白雨の空

氷室をよませ給ける

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

法印定恵

榊の葉乃衣に涼しなつミ川ちよまてさそ出る蔭みん

建保名所百首哥よミける時

従三位範宗

よし野川岸の浪乃音やまさるらんきしのさ乃杜わかれ秋の下草

千五百番哥合に　大納言通具

わすれてハ梅かと思ふ風にまた花ちる雨の日々のかけ哉

文治六年女御入内の屏風に河のほとりにつき

月様よする河　皇太后宮大夫俊成

君か代をのみさきにそ河万代までもすめる流るる

前中納言定家

かきくもりみたらし河瀬にかけてとし世ゝもたえさき水の流れ

夏祓をよめる　前大僧正慈守

里人ハ秋にもなりてみそき川の瀬をそわたるみそきはしけき

千五百番哥合に　土御門内大臣

みな月のもちつれ行のよりまさる君か千世の影ハ見えける

貞和百首哥めされけるついてに

光厳院御製

大かたの河瀬の涼しさハあまたの旗よりそ見えける

建保四年内裏哥合に

前大納言経通

たちみかしさゆふまさる竜田河あらくきえけく一しほまさる秋乃色

新續古今和歌集巻第四

秋哥上

七月一日のあしたよみ侍りける　鎌倉右大臣

昨日こそ夏八くれしか朝戸出の衣手さむし秋乃初風

文保百首哥奉し哥　前中納言定房

水茎乃岡乃葛原吹かへし衣手うすき秋の初風

貞和百首哥に　入道一品親王尊胤

秋きぬとしゆかけゝる風ゆるくけさや竜田の山乃下紅

初秋の心をよみ侍りける

万十
水くきのをかのくすはを
ふきかへしおもしろこら
かみえぬころかも
新古巻四
みつくきのをかのくすはもいろつきて
けさうらかなし秋
のはつかせ

万十一
また秋のふつきまちて
みつのやのこゝろまち
てもいまそとして
春

此夕風よ秋の声とぞ萩のうハ葉に吹わたるらん
源貞世
秋来ぬと萩の葉すさむ風の声に心さわぐ窓のうたゝね
題しらず
権中納言雅輔
露の火乃一しほ露にあくまでみえしハ秋ハ来にけり
後鳥羽院御時秋撰歌合に
後久我太政大臣
吹風よさくら露ちる萩のかつらき山に秋ハ来にけり
久安百首歌よ
花園左大臣家小大進
風の音に物や萩乃うへをハ秋のあハれを誰しいくらし

定家
秋来ておきまよふ秋
えたのゆふ秋風の
おとをくやしき

左大臣
萩にふく音をきゝ只秋風とさびしきものゝやうにしらし
おなじ心を
入道二品親王道助
秋来ぬる風乃やどりとて見えしハいかにやうつる庭の萩原
嘉元百首歌に
前大僧正良覚
露さへにおくとけて小萩の下風の秋ちる夕暮
永和百首歌奉りし時
後己心院前関白左大臣
植をきてなつかしく秋風をまつ庭の萩原
夜の秋といふ事を
後京極摂政前太政大臣

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166　　ガラス使用

一万十
秋風に河浪たかし
しましくはやすめ
つゝ舟よせん
天の河八十あり
うつせみの身のよはひ
とつまちかね
今八十瀬にまま
なかちとほし

天河やこれ船路もみちなくかゝるをしれ星合の空

二品法親王守覚家五十首哥に

源師光

七夕にまかせの雲のかけはしをまてくる事絶ぬ契の空

題しらす

俊頼朝臣

むかしより契りて七夕は人にしられぬ物とそ思はん

建武元年七月七日内裏にて七首哥講せられけるに

前大納言為定

七夕のけふあふことをひく袖も惜しきかなやよ花にまかせん

藤原雅朝朝臣

織女のあまの羽衣露ちりてけさのわかれの袖そ濡ける

崇徳院御時奉りける百首の中に

皇太后宮大夫俊成

たなはたのあひしめつゝしく年なれと今宵はあけぬもの哉

正治二年百首哥に　前大僧正慈鎮

七夕のちきりやこよひむすふらむはれゆくそらに星合の空

貞和三年七月七日花園院にて人々三首哥よまれける時七夕雲

後八条入道前内大臣

星合のゆふへもかくやあまの河雲の衣にへたてぬ袖かさし

七夕を　中納言兼輔

たなはたを渡てはゝ天の川瀬よ紀をそ渡とあらん

天禄四年七月七日天乃たつ乃をとて一品宮のみこの御まけわさし侍ける時乃歌なり

恒徳公

天河風前もくも萬きる河なこ八七夕はなれてわたるらん
かそてわたるのありけるまくらけるかな

中納言保光

年こしていのちの中にも七夕の今宵はいとゝゆかしくもあるらし

延文百首奉りける時　等持院贈左大臣

織女の涙乃露よわきの江のうけ花やをしくらん

正治二年百首奉りける　従二位家隆

藻しほけりたに浜にあるを天の川あまの袖をし思

七夕後朝を心を　源家長

待しくら思ひやられ七夕のあまを切ぬ天乃羽ころも

おなし心を　平師氏

あまの川八重さやかに見るあまを切らむ天の川波

八月のころ選子内親王よりたまはりける御の露

をきまよふつけく露をいかにくまらむおきまよふ

續千載秋上
八月ばかりの夢に見けるを
れいの夜の月に待ちけるの
まよふへつらしとて
選子内親王
露をうちはらひし

拾　是字不載之
せつなれとあかつきも
おもひとも月くつ
かのかへつへ
続古　之道
うつしまあさつく
おもひも波のうれ
しくかへりそれ

とはやまとあかけかなしは　天乃かはらにあかつきおもし

法性寺入道前摂政太政大臣　関白

天の川あまのとわたる霧けさはいつくも出ぬ秋の

読人しらす　相模

秋萩の下葉色つく秋の夜はおもひのま

萩乃露をも涙にしてもまさりける

花山院御製

秋風は吹きよりかかる萩の上の露をもかりはけ

延文二年百首歌めされけるついでに

後光厳院御製

秋きぬと萩の上葉のそよきにも背の色やうつりぬ

野亭夕露といふことを

従三位雅家

古園の野辺乃ま萩を分けそ夕露をわけつつ宿

夜露を　明魏法師

里ハ荒れてくさむら袖の露まさる萩の下　夕露

新玉津嶋社三首奉けるに草花

従二位家尹

夕暮も立そ織野の秋の花に本の下やさはるなり

おなしこころを

権中納言雅縁

玉葉秋上 大納言為家
[illegible]
[illegible]
これのへの秋風

続古今集 大江元光
萩の花[illegible]の袖まで
[illegible]
一の秋の[illegible]

秋の歌の中に　　後京極摂政前太政大臣
うちなびく入江のお花(と)なみこえて夕浪きよく[illegible]
前大納言為氏
鶉なく野原の日影かたぶきておは(と)吹こえて秋の夕風
源師光
露志けきお花(と)を吹風は玉ぬきちらしそ秋の夕くれ
後九条前内大臣家歌合に
土御門院小宰相
ま萬[illegible] 雉の花露うつらぬ袖まで志けき露けさ
河落ると云ことを　　源満元朝臣
むすびの乃乃ゆきて見れ(?)[illegible]秋風そ吹
貞和百首歌に　　前中納言為忠
[illegible]袖をかりて古(?)雉のおの(と)お花[illegible]
秋夕を　　侍従為敦
うき事も何をかとの夕ぐれや人の身秋のならひと
住吉社によみ侍りし歌の中に　　前大納言仲光
[illegible]荻を秋の[illegible]の夕[illegible]
寛元四年日吉社撰歌合に　　源家長朝臣

しらさへ月もと松風に払ひてそ世をいとふ夕暮の空

寛治百首哥に　正三位成実

来ぬ人を松のひとつの夕暮しのふに袖そぬれぬる

○

隆信朝臣　非実治作者

みつむすふ山かけきよき袖にてなれぬ松の夕暮

源氏

鹿苑院入道前太政大臣家百首哥に　雄

夕を　前大納言為尹

さひしさはなれぬる袖に出てもみとまれ松の夕かな

雄哥乃中に　兼良親王

秋来ぬともおとされ（衍字）しら露や行のちに乃松の夕くれ

詩吟の体を
さしもさとなれぬる
ものを

続古今　家隆
津の国や昔の〳〵の
ゆつりうく人〳〵し
こしなくうらもちし
昔のしのひけらんきこえあるく

嘉元百首哥に　中納言為藤

むらさめにむすふかたえの松すゑに夕日の空に袖もさしゝ

郭公しらす　伊勢

家集不載
行秋の夜すさましき松風に秋のゆふへと世をしるかな

桐思夕上二松臺一立茲思蟬声満耳林を

山のを　前中納言定嗣

文永十二秋四百首哥
蟬の声も聞え松にゆふ日かけ松のそれ日の松乃夕暮

蟬夕露を　安泰雅有

松風に秋漏え入てこされておと花にあまる袖の夕露

弘安元年百首哥めされけるついてに

續古今 隆祐

亀山院御製

我宿は風にふまくよりて秋はちかしと姫松のたまのをやめの

法性寺入道前関白家歌合に野風を

源雅光

かるもかくゐなの野原の秋風にこやの池水さゝ浪そたつ

百首歌の中に浅茅露

伏見院御製

庭ゝやあまり門辺の浅茅原露おもしとて乱るらん

文保百首歌に

三條入道前太政大臣

おきあまる秋の野露も涼しきに花の露と虫やなくらん

月におもひこそすむらめを

□阿法師

深き秋の露の草むらわけて虫の音たにもしけき人の尺

九大臣家にて三十首よませ侍りける時野草

虫を

源持信

秋わくるとこの浅茅か露ふかき虫の音

夜もすからうきに尽くすの帰を

法印義寶

ちゝ秋の露やかゝるらむ袖おもしろ

後九条前内大臣家歌合に

前大納言為平

暮々の寝覚をあはれなれやもくのもとにいかならん

嫌好とはいふなるを　権大納言義嗣

霧ふかき野原の浅茅うち払ひしもの露よりやどる秋風

弘安百首歌に　参議教経

秋ふかき夜ふくる原あはれほのかにもよりの松虫の声

関路遠と　源義将朝臣

相坂やまよふつる新手雲路にてうつるらんの　稲

嘉元百首歌に　津守国冬

此歌のうちにこそ落る
とおもしみのつけさせ
て御らんれ

いつはなりん松風ならは夜はすみぬ影月の心うしを　古

山月といふことを　前参議雅有

雲はらふ秋風ならさきのゝつゆ色ふかく外山乃月に秋風ぞ吹　古

新玉津嶋社三十首よまれ侍りしを

西園寺前内大臣女

ちかきよにやとらみねともみのかゝる山の秋乃ゝ月

文治六年女御入内屏風に人家池辺に月

月をもてあそびし所　前中納言定家

涼風もふくや井に照月のひかりをうつる宿の池かな

應永十四年内裏にて題をさくりて人ゝ

百首歌つかうまつりけるに林中月といふ事を

讀侍ける　鹿苑院入道前太政大臣

曇なきやすみの月とみかきをもまたぬそさむき世の秋

建武元年八月十五夜内裏にて五首歌
講ぜられ侍りしに月前松風といふ事を

前中納言公脩

声をたにしらぬなかめの月やとす松のこすゑの世なれの秋に
新む津将秋にそ有る

祝部成光

ありあけさんさくほとをみのや秋の代の山の月の月

貞治二年百首歌めされけるついでに湖月

とよらしをよする世に秋なる

後光厳院御製

にほの海や志賀の浦風海あけてさゆる月の影の
建仁元年八月十五夜撰歌合に湖上月明
といふ事を

参議雅経

辛崎や松の下風を吹すさひて月をさへ浦風ふく
元亨元年九月亀山殿にて歌よませ給ひて
五十首歌つかうまつりける時水郷月を

前大納言実教

湖人たゝぬまゝ衣うつ月やとすらん浦風にすみうき物は

四条宮扇合に　信頼朝臣

万九
ささなみのひらやまかせのうみふけはつりするあまの袖かへる見ゆ

此の歌によりてや月
あさくを四方とひと
うちつけの秋の夜
中とつゝまよ
月次を海をまき
うみとみるを月
次さんらんや

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

故郷月を　　権中納言雅縁

みる世にはむかしみつきしなとめて忘れぬ里と月やすむらん

月前述懐　　前大僧正果守

河水乃ありて世にすむかひもなし誰ところせの出るかたの月

くもりなき月をますみの鏡山みるよにあはれてこゆる秋

山階入道左大臣

侍りし秋よみてなかむる中にも浦月を

源義種

おき川浪にまかせて住吉の松の木の間に月やうすらん

百首歌たてまつりし時浦月

左大臣

月影の宿とつりける浦風になれにし秋をいく住吉の雲

おなし心を　　法印経賢

海人のめる秋はなくてもすむ月の影のやとるところ浦浪

應永十六年八月十五夜内裏人々歌合を

よみて五十首歌奉りける中に寄月述懐

とふ事を　　藤原為衛朝臣

秋の原沖とものとめてすむ月のかけにみちはれわたる

江月を　　権大納言入道内大臣

月影もやとりさためぬ志賀の浦の浪によする浦風の波

月多遠情といふ事を

源有宗朝臣

さらしなやをば捨山の峯までもいひ侍る秋の月 新

貞和百首哥に　中園入道前太政大臣

もしほやくあまの里乃秋の月よそに遠し新今もこそきて

百首御哥乃中に海月

後小松院御製

浦乃秋は月にやたえぬらむ海とぞ見しゆの嵐にも風

建保二年内裏哥合に海辺月といふ事を

順徳院御製

よに世に知らせで

秋の夜乃霜に結びて浦風に月ぞ都

海辺月を　今上御製

見わたせば海士のたくも塩釜の煙の末の月 新

塩屋月といふ事を　前参議雅有

浦人のあまのたくも月にぬるらん煙のよそに浦の末の庵

百首哥奉りし時野月

権大僧都堯孝

向隣篁頭生白露

見わたせば野原の露も今宵月の影ぞ置くのよそにみゆ 新

月前竹　中務卿親王

秋風を秋の見ゆるかとて久しく月のかけに風の音ぞ聞えぬ

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

寳治百首哥に庭月

源俊平

掃らし庭の蓬乃露の上にとはれぬ秋も此月をとふ

鷹司院帥

忍ふとは思はぬ庭の浅ちにすまひくもあらぬ月影

世をのかれてそ月をみる

俊子内親王

家の月はさえてみゆしまいくく寒き秋の宵かな

建保四年内裏歌合に

従三位行能

月影も我をはなれぬともなれは夜更るを惜むらんと

建仁元年撰哥合に河月似氷といふ事を

皇太后宮大夫俊成

千鳥なく河風寒く月さえて氷は秋乃地にてみえけり

寂蓮法師

月清み氷そ山河乃せゝにつゝれきみえる浪

文保百首哥奉りける時

藤原行房朝臣

見るくも又誰出へとて高峯の尾上の光に月は澄ん

建仁元年撰哥合に野月露涼

如願法師

荻原や露と秋風吹ゆくに袖をみするもけちあき月

百首歌たてまつりし時秋月

関白前太政大臣

雲の上に明る六都は月新たまらにうかれしめていさん

弘安八年住吉御幸の時に曉月を

土御門入道前内大臣

ちさ秋も猶あかすやみむの芦田にやとるあり明の月

深山月といふことをよませ給うける

後鳥羽院御製

ときはれて又秋霧にかくれなん吉野の奥の有明の月

新玉津嶋社三十首歌に

藤原隆顕朝臣

おのつからねさめの母と秋のよのくもるはいつか山のはの月

延文百首歌に

等持院贈左大臣

さえわたる松のあらしの嵐に深山の月や氷なるらん

建長三年新撰哥合に田家月を

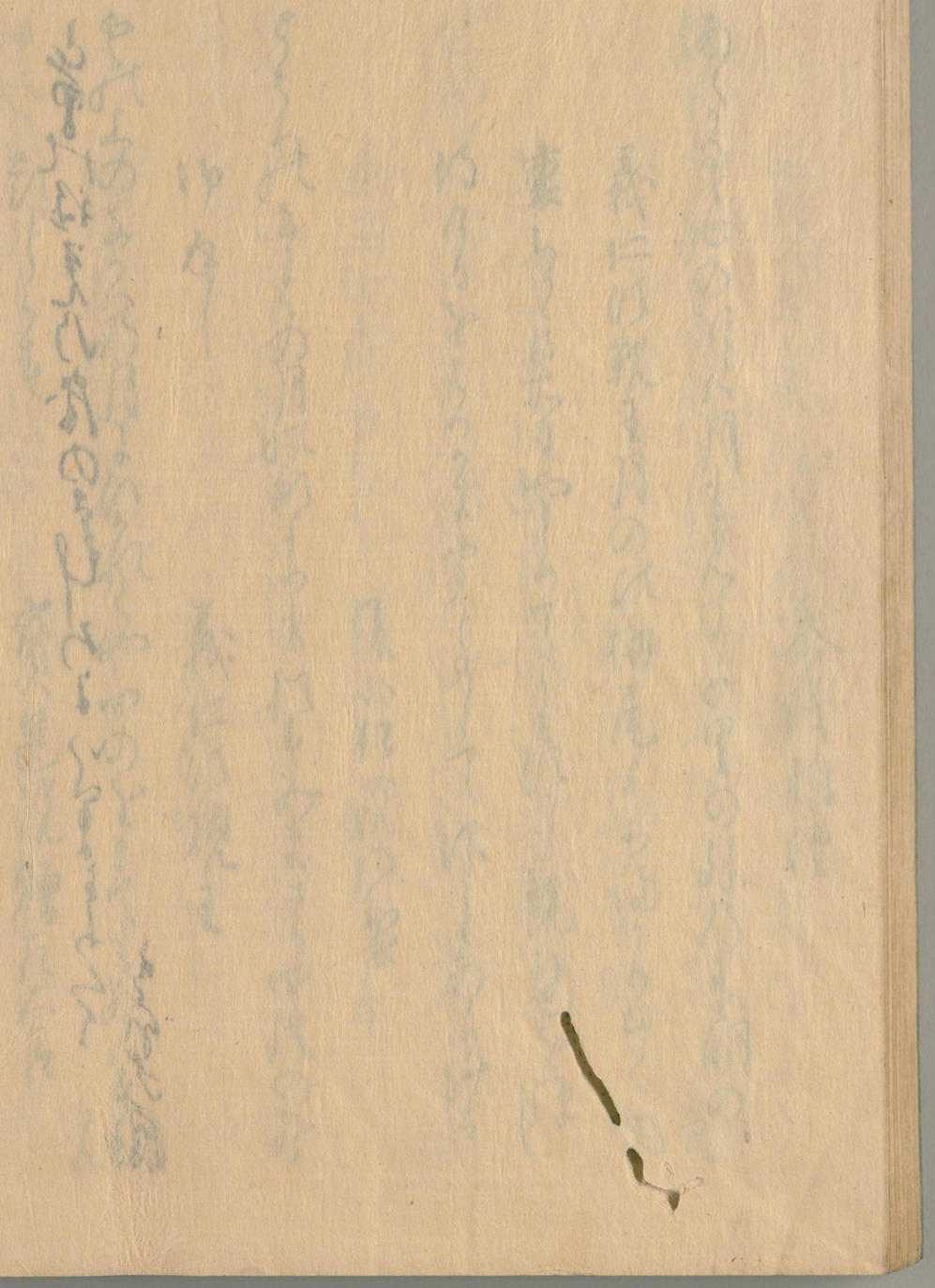
土御門院小宰相

ねまちて宿もる門田の月やまた一刈かれ秋の稲こし

正治二年石清水若宮哥合に月を

853
166

3242



国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』請求記号 853-166
ガラス使用